

あそぶ、まなぶ、いきる。

山と溪谷社

An impress Group Company

各 位

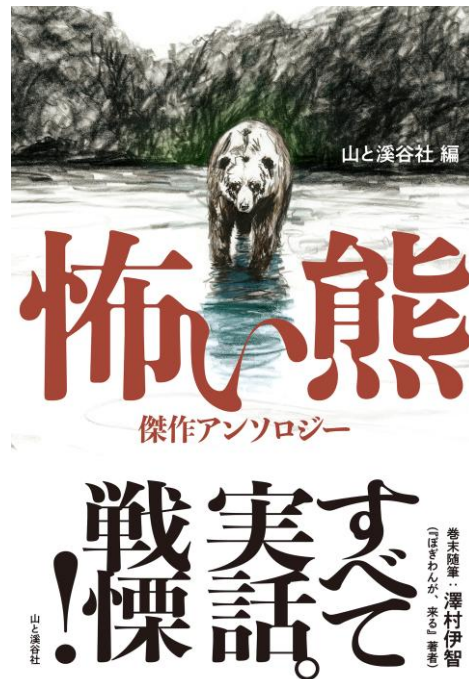
2026年5月19日

株式会社 山と溪谷社

<https://www.yamakei.co.jp/>

「熊」と「人」——実話にもとづく古今の傑作 15 話が迫り来る！『怖い熊』を発刊

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：二宮宏文）は、『怖い熊 傑作アンソロジー』（山と溪谷社：編）を発刊しました。



- 「手負い熊／風雪」今野保 『熊吼ゆる山』(ヤマケイ文庫)
- 「耕平」吉村昭 『熊撃ち』(ちくま文庫)
- 「初マタギ」甲斐崎圭 『第十四世マタギ 松橋時幸一代記』(ヤマケイ文庫)
- 「復讐するクマ」工藤隆雄 『マタギ奇談』(ヤマケイ文庫)
- 「熊対熊の死闘」西村武重 『山の風物詩』(河出書房新社)
- 「タキ」今野保 『アラシ』(ヤマケイ文庫)
- 「熊を殺すと雨が降る」遠藤ケイ 『熊を殺すと雨が降る』(山と溪谷社)
- 「牧場荒しの大熊を倒す」西村武重 『北海の狩猟者』(ヤマケイ文庫)
- 「熊風」戸川幸夫 『戸川幸夫動物文学選集 4 高安犬物語』(主婦と生活社)
- 「襲撃された牛舎」久保俊治 『熊撃ち』(小学館文庫)
- 「まさかの出来事——熊に襲われる」山野井泰史 『アルピニズムと死』(ヤマケイ文庫)
- 「日高・カムイエクウチカウシ山のヒグマ襲撃事故」羽根田治 『人を襲うクマ』(ヤマケイ文庫)
- 「北千島の人食いグマ事件と私」木村盛武 『ヒグマ そこが知りたい』(共同文化社)

「受け継がれる人喰い熊の「DNA」～北見連続人喰い熊事件」中山茂大 『神々の復讐 人喰いヒグマたちの北海道開拓史』(講談社)

「星野道夫の死」ステューヴン・ヘレロ 『ベア・アタックス 2』(北海道大学出版会)

緊張、衝突、激闘、悲劇——生と死が隣り合わせる古今の熊と人の歴史を記録したノンフィクション、および実話をもとにした小説、全 15 作品を収録します。

巻末随筆／澤村伊智

○内容紹介

あれだけ細心の注意を払いながら、老人は不覚にも前屈みになって、地面に落ちた血の跡を目で追った。それがすぐに跡切れているのを見たとき、何か異様な気配を感じた老人は、素早く傍らの大木に身を寄せた。その瞬間、後頭部に烈しい一撃を受け、前のめりに踏鞴(たたら)を踏んだ。—「手負い熊」

耕平は、目を閉じた。背には、熊の体が密着している。顔の横に、熊の頭がのしかかっている。今にも自分の頭蓋骨が熊の逞しく鋭い歯でかみくだかれるような恐怖におそわれた。—「耕平」

熊に襲われて孤立無援の窮地に立たされたとき、時幸は自分が持っていた自信が、音もなく吹きとび、崩れていくのを感じていた。時幸がその一瞬に見せられたのは、きょうまで暮らし、見てきた里でのマタギの世界とはあまりにちがうものであった。—「初マタギ」

寅蔵が家で一杯飲んでそろそろ寝ようと思っていると、奥さんが「なんだか家の周りを誰かが歩いているような気がする、泥棒じゃないだろうね」といって気味悪そうな顔をした。耳を澄ますと、確かに誰かが歩いているような音がある。しかも鼻息が荒い。—「復讐するクマ」

私はある夏ヤマベ釣りに、マタオチ川の奥の大沢へ出掛け一晩泊りで釣っていた。無我の境にひたり、銀鱗濺刺たる大きなヤマベを釣り上げて一人悦に入った。ある場所で大岩が突立っている。川のカーブを無意識に通り返えようとした時、私はグワンと不意に横顔をなぐられて、横飛びによるけながら川原に打倒された。—「熊対熊の死闘」

ガウッ、ガウッと短く吠えながら赤毛が鋭く前足を振るい、一頭の犬がはね飛ばされた。一瞬、犬たちの攻撃に乱れが生じ、その隙に赤毛は傍らの木に抱きついて懸命に登り始めた。その尻や後足に犬たちが喰らいつき、木の幹で踏ん張って下へ引っぱった。—「タキ」

「熊を殺すと雨が降る」という言い伝えが、現在でもマタギの間に生きている。“山の神の血洗い”と古老はいう。山の神が、清らかな山で血を汚したのを怒って、雨や雪を降らせて血を洗い流しているのだと説明されているが、一説では熊は天気が崩れる前に多量に餌を取る習性があり、このときに撃たれることが多いからともいわれる。—「熊を殺すと雨が降る」

家人たちはすぐに倒れている父親を発見して、腰をぬかささんばかりにおどろいた。すぐにいろいろ介抱した甲斐があって、ともかくやっと息をふきかえしはしたが、大変な重傷である。脇腹をかきむしりとられて、鮮血に染って虫の息。—「牧場荒しの大熊を倒す」

彼の場合、その行為は徴発であって掠奪ではなかった。自分の領土にある食物はすべて自分の物であった。だから彼は狐や狸のようにこそこそしなかつたし、びくびくもしなかつた。当然の権利を行うまで、彼に言わせれば、どこから見ても正当な行為だった。—「**熊風**」

黒い目の奥に、怒りが青く光っている。その怒りの色は、こちらに向けられたものではない。思うように動かない自分の体への苛立ちだ。低い唸り声も受けた疵の痛みや、近づく者への威嚇の唸りではない。動かない体をなんとか動かそうと、自分自身を叱咤しているような唸りである。—「**襲撃された牛舎**」

“こんなことが起きるなんて……”現実感が乏しかった。痛みは強烈で、闘う気力すら湧かない。ぼくの血か、または熊の唾液かわからないが、顔が液体でぐちゃぐちゃに濡れていくのがわかった。—「**まさかの出来事**」

私は、クマにやられたなと思った。案の定そうであった。彼らは、福岡大学ワンダーフォーゲル部員であった。まだ上に三人がいるとのことである。危ない、三人が危ない！ どうやらわれわれを襲ったクマと同じクマのようだ。現場、時間などから判断して…… —「**日高・カムイエクウチカウシ山のヒグマ襲撃事故**」

まず私がおの場に踏み込むと、アシが一面に踏み倒され、得体の知れないものがはずれに横たわっていました。それは見るも無残に変わり果てた人間で、土にまみれどす茶色化した肌の色は例えようのないほど不気味なものでした。—「**北千島の人食いグマ事件と私**」

大正十五年に、森下キヨを喰い殺した加害熊は「親仔熊」であった。この事件で人肉の味を覚えた仔熊が、その後成獣となり、同じ手口、すなわち農作業中の人間を襲うようになったとは考えられないだろうか。—「**受け継がれる人喰い熊の「DNA」**」

襲撃したのは、人慣れし、人間の食物に餌づいたクマだった。このクマは、人間に近づくと人間は追い払おうとするかもしれないが、比較的害のないそのいじめ行為を無視すれば、人間の食物にありつけるかもしれないということを学習していた。—「**星野道夫の死**」

○書誌データ

書名:『怖い熊 傑作アンソロジー』

編者:山と溪谷社

発売日:2026年5月19日

定価:2530円(本体価格2300円)

仕様:46判、432ページ

<https://www.yamakei.co.jp/products/2826320200.html>

【山と溪谷社】 <https://www.yamakei.co.jp/>

1930年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心とした山岳・自然科学・アウトドア・ライフスタイル・健康関連の出版事業のほか、ネットメディア・サービスを展開しています。

さらに、登山やアウトドアをテーマに、企業や自治体と共に地域の活性化をめざすソリューション事業にも取り組んでいます。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス（本社：東京都千代田区、代表取締役：塚本由紀）を持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「航空・鉄道」「モバイルサービス」「学術・理工学」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社山と溪谷社 担当：綿

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-105 神保町三井ビルディング

TEL03-6744-1900 E-mail: info@yamakei.co.jp

<https://www.yamakei.co.jp/>